

## K05a 特異な Ib 型超新星 SN 2006jc の可視近赤外線観測

川端弘治、大杉節、山下卓也、植村誠、新井彰、永江修（広島大学）、前田啓一（東大数物宇宙機構、MPA）、富永望、田中雅臣（東大理）、野本憲一（東大理、東大数物宇宙機構）、深沢泰司、水野恒史、片桐秀明、高橋弘充、磯貝瑞希、千代延真吾、保田知則、宮本久嗣、上原岳士、笹田真人、田中祐行、松井理紗子、上田篤、林武広、山崎了（広島大学）、沖田喜一、吉田道利、柳澤顕史、服部堯、青木賢太郎（国立天文台）、木野勝、北川雅裕、佐藤修二（名古屋大学）、黒田仰生（東大理）、定金晃三（大教大）

Ib 型超新星に分類されている SN 2006jc においては、約 2 年前に LBV に関連すると考えられる爆発が観測されていることや、X 線が検出されるなど、特異な点が多い。我々は、2006 年 10 月 14 日から 2007 年 2 月 12 日にかけての 22 晩にわたり、広島大学 1.5m かなた望遠鏡と TRISPEC を用いて可視近赤外線域での測光観測および（偏光）分光観測を行った。また、2006 年 10 月 15 日から 2007 年 4 月 10 日にかけての 6 晩、すばる望遠鏡と FOCAS を用いて可視域の（偏光）分光観測および測光観測を行った。初期の可視スペクトルでは、青い連続光と  $\sim 2000$  km/s の比較的狭い He I 輝線が特徴的である。後者と X 線が観測されたことは、He rich な濃い星周媒体が存在することを示唆する。発見直後に可視連続光で観測された  $\sim 0.3\%$  の直線偏光は、約 50 日後には半分以下に減衰し、初期には光球面付近に非等方性が存在したことが窺える。この時間変化の傾向は通常の II 型超新星とは逆であるが、Ic 型では同様の報告例がある。約 60 日後には、可視域での急激な減光と近赤外域での増光がみられ、異例なほど早い段階からダストが生成されたと考えられる。この赤外超過の傾向は、観測後期の赤領域のスペクトルにも共通してみられるが、早い減衰 ( $\propto t^{-4}$ ) はダスト温度の減少ないしは破壊の傾向があったことを示唆する。本年会では、既に報告されている他の観測結果も交えた SN 2006jc の星周物質および母天体に関する議論について発表する。